

自文化を演じる、異文化を演じる — 神戸の華僑系／非華僑系 舞獅グループにおける文化表象の利用とアイデンティティ

Playing One's Own Culture, Playing the Other's Culture : the Utilization of Cultural
Symbol and the Construction of Identity of Lion Dance Groups in Kobe

高橋 晋一
Shinichi TAKAHASHI

1. はじめに

今日、世界の都市社会の多くは、さまざまなエスニック・グループが共に暮らす「複合社会⁽¹⁾」を形成している。こうした状況の中、それぞれのエスニック・グループは（特にマイノリティの場合に顕著であるが）エスニック・バウンダリーのマーカー、換言すればエスニック・グループのアイデンティティを支える文化要素（言語、宗教、音楽、芸能など）を意識的に選択し⁽²⁾、機会あるごとにそれを集団内で、あるいは集団の外に向けて表出することによって、一つの集団としての凝集性を高め、外部に対しては自集団の存在を主張しようとしている。

一般に、特定のエスニック・グループに固有の文化は、その内部で消費される。なぜならそれぞれの文化現象は当該社会の中に深く埋め込まれ意味づけられた存在であり、個々の文化現象を当該社会という枠組みから切り離して取り出すことは通常あまり意味を持たないからである。にもかかわらず、エスニックな性格を強く持った文化が、当該のエスニック・グループによって表出（利用）されるのみならず、同一地域内に存在する他のエスニック・グループによって何らかの目的をもって戦略的、選択的に取り入れられ、「利用」されるようなケースもありうる。本稿で取り上げる神戸の舞獅（中国獅子舞）もそうした事例の一つである。

「舞獅」とは中国固有の獅子舞のことを言う。舞獅は世界各地の中国人社会（中華人民共和国・台湾・香港の漢人社会、さらには世界各地の華僑・華人社会）で演じられてきたもので⁽³⁾、民俗社会では地域の寺廟の祭りや春節（旧正月）などの年中行事に登場し、邪を祓うという宗教的な意味合いを持ち、また近年の都市社会ではクラブによる競技・スポーツといった意味合いを持ちながら発展してきた⁽⁴⁾。

日本では、華僑社会として 19 世紀後期以来の古い歴史を持ち、多くの華僑人口を擁する横浜、神戸、長崎⁽⁵⁾にそれぞれ舞獅のグループが存在する。本稿で事例として取り上げる神戸には現在舞獅のグループが 5 つあり、それぞれ別個に活動を行っているが、ここで注目すべきことは、神戸には華僑を成員とする舞獅のグループ（3 つ）に加え、日本人による舞獅のグループが 2 つ存在することである。

特定のエスニック・グループに固有の文化（本稿の場合は舞獅）を、「日本」という異質な社会

の中で、その文化を保持するエスニック・グループ（華僑）の成員が演じることと、その文化を共有しないエスニック・グループ（日本人）の成員が演じることとの間には、いかなる差異が存在するのだろうか。これは、言い換えれば、外国人（移民、特にマイノリティ）が移住先の異文化の中で自文化を演じることと、自国人が自文化の中であえて異文化を取り入れて演じることの意味の違いを明らかにすることでもある。本稿では華僑による舞獅グループ（華僑系）と、日本人による舞獅グループ（非華僑系）の性格を対比する中から、「舞獅」というエスニックな文化表象がそれぞれのグループにおいてどのような形で利用され、意味づけられているか、またそのことが当事者（舞獅の演者）のアイデンティティとどのような関わりを持っているかを検証する。

本稿ではまず、神戸における舞獅の展開を歴史的に跡づけた上で（2. 神戸における舞獅の展開）、各舞獅グループの現在の活動を中心としたプロフィールを整理する（3. 舞獅グループの現況）。最後に、特に「華僑系」と「非華僑系」の舞獅グループの性格を比較検討する中から、「舞獅を踊る」という同一の行為に対する当事者の意味付けの差異とその背景にある要因を明らかにする（4. おわりに）。

2. 神戸における舞獅の展開

2-1. 神戸の舞獅前史

本章では、神戸における舞獅の展開過程を、時代を追って整理しておくことにする。

後述するように、神戸にパーマネントな組織としての舞獅グループが生まれたのは1979年のことである（神戸華僑総会舞獅隊。以下「舞獅隊」と略す）。本節では、舞獅隊の発足以前（すなわち1979年以前）の神戸における舞獅のあり方を確認しておきたい。

舞獅は本来中国文化であり、神戸における舞獅の歴史も、神戸華僑の歴史と深い関わりを持っている⁽⁶⁾。神戸では、華僑たちの手によって戦前から舞獅が踊られていたというが⁽⁷⁾、当時、具体的にどのような人が、どのような機会に舞獅を踊っていたかについてはよくわかっていない。しかし少なくとも、現在の舞獅隊のような組織的な活動はみられなかったようである。

1937年に日中戦争が勃発すると、神戸華僑の中には一時帰国するものが続出、神戸に残った貿易商（華商）も一時休業するなど、神戸港の貿易は大幅に縮小した⁽⁸⁾。しかし戦後になると、東南アジア方面を中心として貿易が復興⁽⁹⁾、香港や東南アジアなどから多くの中国人船員が神戸にやってくるようになった。中でも香港との間の貿易は盛んで、香港の船員たちは1～2週間ほど神戸に滞在し、その間頻繁に中華クラブ（麻雀・ビリヤードなど大人の遊び場）に出入りしていた。当時の神戸華僑は、香港の船員たちとよく一緒に（娯楽の一種として）舞獅をやっていたという⁽¹⁰⁾。香港の船員が参加していたこと、神戸には中国南部出身の華僑が多い⁽¹¹⁾ことから考えると、当時踊られていた舞獅は、現在と同様の南方獅子⁽¹²⁾であったと思われる。

しかし神戸港へのコンテナ船就航（1967 年）により香港から船員が来ないようにになると、若い華僑の伝統文化に対する関心の薄れも手伝って、神戸の舞獅は次第に廃れていった。一時、台湾出身者が中心となって舞獅が復活したこともあったが、1970 年代初めにはそれも衰退していった。旧正月などに舞獅を踊ることもあったが後継者がおらず、70 年代後半には舞獅はまったく行われなくなった。神戸の舞獅はここで一度途絶えた形になったのである。

なお、この時代にはまだ舞獅は神戸華僑社会内部の文化であり、日本人が舞獅を目にする機会は多くはなかったようである。

2-2. 神戸華僑総会舞獅隊の結成

戦後も 1970 年代になると、神戸華僑は三世、四世の時代に入る。日本に生まれ育った彼ら／彼女らは、日本文化を生活の基礎とし、第一言語は日本語である。中国文化は後天的に習得する文化であり、中国語は日常的にはほとんど使わない。交際範囲は華僑に限らず、日本人社会へと広がっている。その一方で、中国の故郷との関係は希薄になりつつある。このような社会変化の中で、神戸華僑の中国人としてのアイデンティティは次第に薄れていくことになった⁽¹³⁾。

こうした変化に大きな危機感を感じていたのが、当時、神戸華僑社会の指導的地位にあった華僑一世、二世であった。1979 年に開かれた神戸華僑総会⁽¹⁴⁾の理事会の席上では、若い華僑の「中国離れ」をくい止め、中国人としてのアイデンティティを喚起させるため舞獅を再開してはどうかという話が持ち上がり、全会一致で舞獅の復興が進められることになった。

当時神戸中華同文学校教諭であった蔡勝昌氏と老華僑（一世）の李家讓氏が神戸中華同文学校の卒業生に呼びかけ、1979 年に「神戸華僑総会舞獅隊」が結成された。結成当時の舞獅隊のメンバーは華僑の青年 5 人であったが、全員、神戸中華同文学校の卒業生であった。華僑社会には「僑社の三宝」という言葉がある。「華僑社会の三本の柱」という意味であるが、具体的には僑団（華僑団体）、僑校（華僑学校）、僑報（華僑新聞）の三つを指す⁽¹⁵⁾。舞獅隊の結成にあたっては、神戸華僑総会という「僑団」、神戸中華同文学校という「僑校」のネットワークが巧みに活用されたとと言える。

舞獅の指導は当初、中国でも舞獅の経験があった李家讓氏があたったが、同氏が 1980 年に急逝して以後は、横浜に出向いて舞獅経験者（華僑）の指導を受けた。神戸華僑社会における舞獅の伝承は断続的なもので、その「原型」を追求し正確に「復元」することは不可能であったが、重要なのは、若い世代の華僑が、舞獅という明らかに日本文化と差異化できる記号⁽¹⁶⁾としての「中国文化」を自ら演じることを通じて、「中国人としてのアイデンティティ」を内面化させていくことであり、極端に言えば、それが「借り物」であっても、どこにも根のない「創られた伝統⁽¹⁷⁾」であっても構わなかったのである。

舞獅隊の最初の公演は、1981 年に神戸ポートピアアイランドで開かれたイベント「ポートピア 81」であった。その後テレビや新聞で紹介されるにつれ知名度も上がり、イベントに出演する機会も増

えていった。

2-3. 非華僑系舞獅グループの誕生

非華僑＝日本人のグループとして最初に舞獅を導入したのは、神戸市立兵庫商業高等学校龍獅團（以下、龍獅團と略す）であった。同校教諭の阪口智敬氏が、学校の特色活動の一つとして、神戸という土地柄にこだわった取り組みができないかと考えたのがきっかけで、1987年にメンバー8人でスタートし、翌88年には学内の文化祭で初披露をした。その後、学校活動の一環というユニークさと技術の高さが注目されるようになり、各方面から依頼を受け、さまざまなイベントに出演するようになった。

龍獅團に続いて1989年に結成されたのが、現在は神戸を代表する観光地となっている神戸南京町を活動拠点とする吼獅堂である。

戦前、南京町には世界の珍品を集める店が立ち並び大変なにぎわいを見せたという。しかし太平洋戦争の空襲により南京町は全焼し、その後復興はしたものの、以前見られたようなにぎわいもなくなった。戦後一時衰退した南京町を再び活性化しようと1977年に結成されたのが南京町商店街振興組合である。1981年には南京町復興環境整備事業実施計画をまとめ、以後、中国風の楼門（南楼門は1982年、東楼門は1985年に完成）、あずまや（1983年完成）を作るなど、中国色を前面に押し出した街づくりを積極的に推し進めてきた⁽¹⁾。

中国的な景観づくりと合わせ、神戸南京町にふさわしい中国色に富んだイベントも創案された。それが、中国の伝統的な旧正月の祭り（春節）にちなんだ「春節祭」である。1987年（1月29日～2月1日）には南京町のメインストリートを舞台として第1回春節祭が開催され、長さ40mの舞龍（龍踊り）、舞獅隊による舞獅、少林寺拳法、太極拳、神戸中華同文学校生徒による中国舞踊など中国色豊かな多くの出し物が披露された。春節祭は回を重ねるごとに規模を拡大し、現在では、3日間で延べ40万人あまりの観光客を集める神戸南京町最大のイベントに成長している。

このような神戸南京町の活性化、観光化の一環として、具体的には春節祭をはじめとするイベントの目玉として、「戦略的に」舞獅の導入が検討されたのである。春節祭が始められた当時、神戸南京町には舞龍のグループ（舞龍隊）はあったが、舞獅のグループはなかった。そこで当時舞龍隊のメンバーであった山下雅弘氏が友人らに呼びかけて男女5人で1989年に結成したのが神戸南京町吼獅堂（以下、吼獅堂と略す）である。吼獅堂は神戸南京町で行われるイベントへの出演を軸足に置きながらも、その後は、依頼に応じてさまざまなイベントに出演するようになっている。

日本人にとって、中国文化である舞獅は根本的に「異文化」「外なる文化」である。それがどうして文化の壁をたやすく乗り越え、受容されることができたのか。

第一に指摘できる点は、龍獅團、吼獅堂においては、舞獅が「華僑の文化」＝「外なる文化」ではなく、「神戸の文化」＝広い意味での「内なる文化」ととらえられていることである。このように解釈を拡大することにより、異文化を取り入れることの正当性、論拠を獲得することができる。

第二に、舞獅は信仰のように観念的なものではなく、芸能、すなわち一種のパフォーマンスであり、その背後に隠された文化的意味はともかく、表面的な所作だけであれば模倣可能な文化であったということである。

こうして、神戸に華僑系の舞獅隊⁽¹⁹⁾、非華僑系の吼獅堂⁽²⁰⁾、龍獅團という3つの舞獅グループが結成されたが、神戸南京町春節祭や中秋節（1998年10月に第1回を開催）といった地元の大きなイベントで競演する以外は、それぞれ別個に活動を行っている。

2-4. 華僑学校における舞獅の導入

舞獅隊の結成から約10年経った1990年代に入ると、今度は、華僑社会の中に根を下ろした舞獅をいかに下の世代に継承していくかという課題が浮かび上がってきた。そこで注目されたのが、神戸華僑の子弟の教育の場となっている華僑学校である。神戸の華僑学校としては、小・中学校を持つ神戸中華同文学校（神戸市中央区中山手通6丁目、1899年創立）と、華僑幼稚園（神戸市中央区中山手通6丁目、1950年創立）がある。華僑幼稚園の卒園生の多くは神戸中華同文学校に進学している⁽²¹⁾。また、神戸中華同文学校の卒業生は非常に結束が強く、そのネットワークは神戸華僑社会の重要な社会的基盤となっている。

神戸中華同文学校では、1995年に舞獅隊から、将来舞獅をやってほしいと獅子4頭の寄付を受けた。これがきっかけとなって学校の創立100周年記念行事の一つとして舞獅を踊ることになり、同校教諭・黄武駿氏が舞獅隊の練習に参加、舞獅の技術を修得した。黄氏の指導のもと、創立100周年記念の文化祭（1999年）に小学校4年生の有志により舞獅が披露された。当時のメンバーは15～20人（男女ほぼ同数）で、3、4頭の獅子が出演した。翌2000年4月から名称を「舞獅同好会」としメンバーを拡充、以後、コンスタントに学内外で舞獅を披露している。

神戸華僑幼稚園では、1993年頃から保育の一環として舞獅を始めた。舞獅といっても創作獅子舞（お遊戯）であるが、それでも園児に実際に中国芸能に触れる機会を作り、将来本格的な中国芸能に入っていく基礎を提供するという意味がある。幼稚園のお遊戯会のほか、南京町春節祭などのイベントで披露したこともある。

このように、神戸華僑社会においては、華僑学校という（華僑の世代連続的な）システムが、中国文化の伝承＝後継者育成の場として巧みに利用されているのである。

3. 舞獅グループの現況

前章では、神戸における5つの舞獅グループの形成過程を、その背景（結成の契機）と関連づけながら確認した。本章では、これら5つの舞獅グループの現況（構成・指導・活動）について、2001年に行った聞き取り調査⁽²²⁾の結果をもとに簡単に整理しておきたい。なお、各舞獅グループの概要

については表 1 にまとめた。

表 1 神戸における舞獅チームの概要

名称	舞獅隊	舞獅同好会	華僑幼稚園	吼獅堂	龍獅團
華僑系／非華僑系の別	華僑系	華僑系	華僑系	非華僑系	非華僑系
母胎	神戸華僑総会	神戸中華同文学校	華僑幼稚園	神戸南京町商店街振興組合	神戸市立兵庫商業高等学校
創立年	1979年	1999年	1993年頃	1989年	1987年
人数	約30名	7名	約30名	約20名	約50名
舞獅導入の目的	中国人アイデンティティの喚起	民族教育、中国文化の伝承	民族教育、中国文化の伝承	南京町の活性化	学校の特別活動
指導	老華僑→横浜華僑→内部指導	教諭（華僑）	教諭（華僑）	横浜華僑、マレーシアの舞獅経験者、内部指導	シンガポールの舞獅経験者
活動	華僑社会の行事＋各種イベント	学内の行事＋各種イベント	園内の行事＋各種イベント	各種イベント	各種イベント
世界大会への出場経験	無	無	無	有	有
現在の活動の方向性	中国文化の伝承	中国文化の伝承	中国文化の伝承	技術の向上、競技での勝利	技術の向上、競技での勝利

3-1. 舞獅隊（神戸華僑総会）

2001 年現在の舞獅隊のメンバーは約 30 人（隊長＝潘天良氏）だが、常時活動できるのは 8 人くらいである。メンバーの中には福建省や台湾の出身者もいるが、もっとも多いのは広東省出身者である。全体の約 9 割が神戸中華同文学校の卒業生であり、卒業後、友達を誘ってチームに加入するということもある。メンバーの年齢は小学生から 40 歳代までと幅広い。チームに加入するための条件は一切ない。

指導は、上の者（経験の長い者）が下の者（経験の浅い者）に教える。結成当時は老華僑の李家讓氏に指導を受けたが、1980 年に李氏が亡くなったため、横浜の（華僑の）中学校に行き基本を習った。現在もその基本を守りつつ、舞獅に関して新しい情報を得るたびにそれを加えている。例えば、中国や香港に行き舞獅に詳しい人に会う、獅子を売っている人に最近の流行の踊りを聞く、舞獅の世界大会のビデオやほかの舞獅チームからよい所を踊りに取り入れるなどである。

舞獅隊の活動の拠点は華僑社会である。華僑社会のさまざまなイベントや祝い事に呼ばれて参加する。華僑関係者の前での演技は、招待者や参列者がみな知り合いであり、しかも舞獅を見る眼が肥えているため、特に力が入る。華僑の結婚披露宴に呼ばれて踊ることもある。そのほか、国慶節、新年（同文学校で披露）、神戸華僑幼稚園のバザー、神戸関帝廟や京都府宇治市にある黄檗宗万福寺の普度勝会（中国の伝統的な盆行事）などでも舞獅が踊られる。

舞獅隊は、学校行事や慰問活動、レセプションの余興など、一般のイベントにも出演する。現在、年平均 70 回程度の公演をこなしているが、出演の機会は年々増えている。

3-2. 舞獅同好会（神戸中華同文学校）

2001 年現在の舞獅同好会のメンバーは 7 人で、内訳は 4 年生男子 1 人、6 年生男子 4 人、6 年生女子 2 人。ほとんどの生徒が前年から続けてやっており、1999 年の結成当時から続けている生徒もいる。舞獅同好会への入会資格は、ほかの部活動に入っておらず 4 年生以上という条件だけである。

指導は、顧問である同校教諭・黄武駿氏が、同好会の結成当初から担当している。黄氏は舞獅隊に入り、舞獅の技術を習得した。

イベントなどへの出演は学校の許可が必要である。メンバーが小学生ということと、練習時間の問題もあり、月 1 回の出演が限度である。校内の活動では文化祭、対外的な活動としては、2000 年は住吉神社、子供の春祭り、地域の夏祭り、ロータリークラブの勉強会、展覧会、神戸小学校のフェスティバル、南京町中秋節などに出演した。南京町春節祭で踊ったこともある。

3-3. 神戸華僑幼稚園

メンバーは、華僑幼稚園の年長児約 30 名。

年長児担当の先生方が楽器と踊りの指導をしている。獅子頭は華僑が香港から買ってきたものを寄付してもらった。楽器は舞獅隊からの寄付である。

園内ではお遊戯会（毎年 2 月）で舞獅を発表する。お遊戯会では、舞獅以外にもさまざまな中国的な出し物をする。保育や遊びに中国的なものを取り入れることによって、華僑幼稚園としての特色を出している。園外のイベントにも、依頼があれば出演する。南京町春節祭で踊ったこともある。

園児が本格的な舞獅を直接見る機会として、毎年幼稚園のバザーのときに行われる舞獅隊の公演がある。

3-4. 吼獅堂（神戸南京町）

2001 年現在のメンバーは 20 人前後で、うち女性は 5 人。全員が日本人で、メンバーのほとんどは南京町以外の人である。南京町の人には店が忙しく、なかなか参加できない。年齢は 18 歳から 40 歳代までで、20 歳代が一番多い。現在の代表者は曾野恵一氏。チームに加入するための特別な条件はない。

現在、横浜の舞獅チームである「横浜中華学院校友会」と交流があり、指導を受けている。マレーシアの「麻坡閩聖宮龍獅團」（世界大会で 12 回の優勝を誇る世界獅王と呼ばれるチーム）の人にも指導を受けた。チーム内では、当初からいるメンバーが若い人に教える。

活動は、神戸南京町の春節祭や中秋節などの大きなイベントがメインである。そのほか商店のオ

ーブニング、会社の親善会、結婚式、養護施設のイベント、中学校のソフトボール大会のオープニング、個人の家の竣工式などに呼ばれたりすることもある。鳥取県東伯郡東郷町の燕趙園（鳥取県と中国河北省の友好のシンボルとして建設された中国庭園）では、年2回ほど公演をしている。こうしたイベントにはチーム創設当初から参加していたが、以前よりも出演の機会は増えた。2000年には20回くらいイベントに参加した。

2001年8月には、横浜中華街で行われた「YOKOHAMA LIONDANCE FESTIVAL」（横浜関帝廟に祀られている関帝の誕生日を祝う祭り）に、神戸の他の2つの舞獅チーム（吼獅堂、龍獅團）、横浜の3つの舞獅チームとともに出場した。

結成10周年を迎えた1999年8月には、マカオで開かれた世界大会に参加した。世界大会にはこれまで横浜のチームが出場してきたが、技術の向上が評価され吼獅堂が出場することになった。全員日本人というチームが世界大会に出るのは吼獅堂が初めてで、注目を浴びた。

舞獅の目的は、観客に自分たちの誇りや、中国人に限らず日本人でも舞獅はできるということを伝え、喜んでもらうことである。

3-5. 龍獅團（神戸市立兵庫商業高等学校）

2001年現在のメンバーは約50人。兵庫商業高等学校の生徒であれば誰でも参加できる。性別を問わず参加できるが、女子生徒が多い学校なので、メンバーも4分の3が女子となっている。創設以来、同校教諭の阪口智敬氏が顧問を務めている。

チームの体制は部活動そのもので、チームの主体は生徒である。団長1人、副団長1人でチームをまとめている。龍獅團の特徴は、生徒主体の部活動であることと、メンバーが毎年入れ替わりながら発展していくことである。練習にOBが参加することもあるが、大会には出ない。

グループの創設当初は、シンガポールで舞獅の演技の研修を受けた顧問の阪口氏が指導に当たっていたが、1991年以降は、シンガポールで「惹蘭勿利民衆倶楽部龍獅團」を主宰しているジョニー・タン氏に年1回、直接指導を受けている。

活動としては、神戸南京町春節祭、中秋節をはじめ、官公庁や民間主催のさまざまなイベントに参加している。2001年11月には島根県出雲市で開かれた「IZUMO ドラゴンフェスタ 2001」に招聘され、長崎県長崎市の長崎十善寺龍踊会、山口県岩国市の蛇踊、鳥取県鳥取市の酔龍団（龍獅團が舞龍の指導に当たっている）などとともに舞いを披露した。出演回数は年によって大きく変わるが、2000年には過去最高の105回の出演があった。創設当初は年1回、文化祭のみの出演であった。

1999年11月にはシンガポールでの国際龍獅大会に日本代表として出場し、2001年1月に香港で開かれた「世界夜光龍醒獅邀請賽 2001 香港大会」では、「夜光龍」（鮮やかな蛍光色に色塗られた龍で舞を行う舞龍）で3位の成績を収めた。

龍獅團の活動の目的は、レベルアップを図ることである。演技は毎年レベルアップしている。毎

年、新しい技をタン氏から教わっている。

4. おわりに

以上、神戸の各舞獅グループの結成に至る過程、および活動の現況を眺めてきた。

5つの舞獅グループに共通して言えることは、舞獅という中国芸能が、「伝承」という穏やかな形ではなく、特定の意図をもって戦略的に、半ば突発的に導入されたという点である。「2-1. 神戸の舞獅前史」で見たように、華僑社会の内部では確かに戦前から舞獅は踊られてきたが、それは断続的・断片的なものであり、神戸の舞獅は、実際には1979年の舞獅再興（舞獅隊の結成）の際に新たに創出された文化＝創られた伝統（王維の言葉を借りれば「新伝統芸能⁽²³⁾」）と言ってよいものである。

華僑社会においては、舞獅は薄れゆく中国人アイデンティティの再興・強化（舞獅隊）、継承（神戸中華同文学校、華僑幼稚園）を目的として導入された。一方、非華僑系の舞獅グループについて見ると、神戸南京町では「中国色」を生かした街づくりの一環（イベントの華）として、兵庫商業高等学校では、国際都市・神戸にふさわしい教育の一環として舞獅が取り入れられた。すなわち、社会的効果（舞獅隊、神戸中華同文学校、華僑幼稚園）、経済的効果（吼獅堂）、教育的効果（龍獅團）というように、何らかの効果をもたらす「手段」として舞獅というエスニックな文化表象が意図的に導入（利用）されたのである。

こうした共通点がある一方で、華僑系と非華僑系の舞獅グループを対比してみると、特に活動の場、活動に対する意識（意味づけ）において大きな差異が見られる。こうした違いは、華僑系の舞獅グループが「華僑社会」という「根」（その文化的意味が還元されるべき社会）を持っているのに対し、非華僑系の舞獅グループはそうした根を持たないという点から派生している。

中国文化である舞獅は、神戸華僑社会において「文化的に意味を持ったもの」として社会の中にしっかりと埋め込まれている。舞獅隊は、神戸関帝廟や黄檗山万福寺（京都府宇治市）の普度勝会に参加し、神前の広場で踊りを披露し、邪を祓う。国慶節などの華僑のイベントや結婚式などの行事に出演し、華を添えることもしばしばである。こうした華僑社会に根ざした活動を重ねていく中から、メンバーの「華僑社会の中の舞獅」「華僑社会のための舞獅」という意識が生まれてくる。華僑学校における舞獅の「教育」も、このような意識を早い時期から醸成することに役立っている。こうした活動は、舞獅の演技を通して「中国性」が内面化されていく（中国人としてのアイデンティティが確立されていく）過程とも言える。導入当初、漠然と「中国文化を象徴する舞獅」であったものが、こうした過程の中で「神戸華僑社会の舞獅」として定着していった。

一方、非華僑系（日本人）の舞獅チームは、「中国文化」としての舞獅を埋め込むべき適切な社会・文化的文脈を持たない。自ずから、舞獅の導入は形式面にとどまる。文化を共有しない彼らが舞獅を導入した時点で、舞獅の「脱文脈化」「脱文化化」という現象が起こり⁽²⁴⁾、少なくともメン

バーの意識の中では（観客から見れば同じ「舞獅」という文化要素でありながら）それが「中国文化」であるという意識は次第に後退し、「パフォーマンスとしての舞獅」という側面が強調されていくことになるのである⁽²⁵⁾。

もちろん、舞獅は本質的にパフォーマンス、観客に見せるための文化としての性格を持っており、華僑系の舞獅グループにそうした側面が見られないと言うわけではない。例えば、舞獅隊は日本人向けのイベントでは、日本人の観客に受けるように踊りにアレンジを加えている。「形にとらわれることなく、お客さんとふれ合い喜んでもらっての舞獅である」という話も聞かれた（舞獅隊メンバーの発言）。ただし、華僑系の舞獅グループの場合「中国伝統文化を継承するという意識のかたわら、観客にも喜んでもらえるのでやっている」（舞獅隊メンバーの発言）と言うように、何よりもまず「華僑社会の中の舞獅」という点が強調されており、パフォーマンスとしての舞獅という側面は、意識の上では二次的なものとなっている。

非華僑系の2つの舞獅グループにおいては、公演回数の増加、県外・海外の舞獅チームとの交流、海外の指導者招聘といった活動の展開の中で、グループ結成当初の目的（南京町の活性化、生徒の教育活動）が後退し、近年は舞獅の「技術の向上」それ自体が活動の大きな目標となるようになってきた。その一つの到達点が世界大会への出場であり、ここにおいてパフォーマンスとしての舞獅は、さらに「競技」「スポーツ」としての性格を持つに至る。こうした過程で育まれるアイデンティティは、華僑のようにエスニックなものではなく、「神戸南京町吼獅堂」「兵庫商業高等学校龍獅團」という自らが所属する舞獅グループへの帰属意識にすぎない。

華僑系、非華僑系を問わず、彼らが演じる舞獅という芸能それ自体は、観客の目から見れば明らかに「中国芸能」であり、そのエスニックな性格を払拭することはできない。しかし演者の視点から見れば、華僑系の舞獅グループにおいてはエスニックな面が強く意識された「中国伝統文化」（舞獅という記号の深層的解釈）として、非華僑系の舞獅グループにおいては、エスニックな面が後退し、脱文化化された「パフォーマンス」（舞獅という記号の表層的解釈）としてとらえられていることが、ここまでの検討から明らかになった。こうした差異を生み出した要因は、結局は、舞獅という文化要素を定位する文化・社会的コンテキストがあるかどうかという点にある。エスニックな文化要素は、当該エスニック・グループの中に位置づけられた場合にはコンテキスト依存的⁽²⁶⁾（context-sensitive）で内包的（intensive）な意味を、他のエスニック・グループに選択的に取り入れられた場合にはコンテキスト自由＝脱コンテキスト的（context-free）で外延的（extensive）な意味を付与されつつ展開していく傾向にあると言えるのである。

注

(1) Furnivall, J. S. Netherlands India: A Study of Plural Economy Cambridge University Press, 1939 (Reprinted 1967).

(2) Barth, F. "Introduction." in: Barth, F. (ed.) Ethnic Groups and Boundaries Oslo: Universitets-

forlaget, 1969, pp.14-15.

(3) 中国の舞獅の起源は漢代にまでさかのぼるという（曾慶國『舞獅技藝』台北：書泉出版社、1997年、3頁）。

(4) 特に香港および東南アジアの華僑・華人社会では、ここ数十年来、舞獅は芸術性を兼ね備えたスポーツとしての性格を強めている。

(5) 現在の華僑人口は横浜約1万人、神戸約8千人、長崎約500人である（王維『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ祭りと芸能を中心に』風響社、2001年、308頁）。

(6) 1868年（慶應3）の神戸開港とともに、華僑は神戸に進出したと考えられている（中華会館編『落地生根－神戸華僑と神阪中華会館の百年』研文出版、2000年、34頁）。

(7) 元神戸中華同文学学校教諭・蔡勝昌氏のご教示による（2001年7月）。

(8) 中華会館、前掲書、193-196頁。

(9) 中華会館、前掲書、229頁。

(10) 蔡勝昌氏のご教示による（2001年7月）。

(11) 神戸華僑の出身地の内訳は圧倒的に台湾が多く、以下、広東省、福建省、山東省、浙江省と続く（王、前掲書、334-335頁）。

(12) 舞獅の系統は、広東省を中心とした中国南部（華南）で盛行している南方獅子と、中国北部（華北）を中心に広まっている北方獅子に大別することができる。（近年は中国北部からの移民が増加しているが）伝統的な華僑の主な出身地は広東省・福建省、台湾などの中国南部地域であることから、世界各地の華僑・華人社会で見られる舞獅のほとんどは南方獅子となっており、日本の華僑社会でも南方獅子が多く踊られている。

(13) 過放『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂、1999年、170-174頁。

(14) 神戸華僑総会（1945年設立）は、神戸在住華僑全体を統括する組織である。

(15) 安井三吉「神戸の中国人社会」（合田濤編『アジア・太平洋の人と暮らし』4、南窓社、1990年）、156頁。

(16) エスニック・バウンダリーのマーカーとして選択されるさまざまな文化要素のうち、芸能は、演者について言えば個々人の身体感覚に訴えつつ、相互主観的・共同感覚的に自分たちの固有文化を意識できる点、観客に対しては視覚・聴覚を通じて文化の固有性をアピールできるという点で、重要な位置を占めていると言えよう。

(17) ホブズボウム、E. 「序論－伝統は創り出される」（ホブズボウム、E.、T. レンジャー編『創られた伝統』前川啓治他訳、紀伊國屋書店、1992年）、10頁。

(18) 王、前掲書、165-170頁。

(19) 舞獅隊には国籍を問わず加入することができ、2001年現在2人の日本人が参加しているが、グループ全体から見れば華僑が主体であることには変わらない。

(20) 結成当初は1、2人の華僑も加わっていたが、現在は日本人だけで構成されている。

(21) 中華会館、前掲書、249-250頁。

(22) 各舞獅グループへの聞き取り調査は 2001 年 7 月～ 11 月にかけて行った。調査は徳島大学総合科学部開講「地域調査実習 B」の授業の一環として行われたもので、聞き取り調査にあたっては調査員として学生諸氏の協力を得た。より詳細な聞き取り調査のデータに関しては、高橋晋一他「神戸の舞獅」（呉宏明編『神戸と外国文化』第 9 集、京都精華大学人文学部呉研究室、2002 年、122-157 頁）を参照されたい。

(23) 王、前掲書、272 頁。

(24) 「脱文化化」の一例としては、女子の舞獅参加の問題が挙げられる。本来中国では女子が獅子に入ることは忌み嫌われ、華僑の場合でも子供を除き女子が獅子を担ぐことはまずない。しかし兵庫商業高等学校龍獅團では、神戸らしい活動ということで舞獅に取り組んでいるので、こうした伝統にこだわらず女子も獅子を担いでいる（ただし、これには同校に女子生徒が多いという特殊事情もある）。

(25) 華僑系の舞獅グループにおいては、依然として舞獅は「手段としての文化」、すなわち「中国」を表象し、それを通じて自己（中国人としてのアイデンティティ）を確認する文化としての性格を強く持っているが、非華僑系の舞獅グループにおいては、導入の時点では（踊りを通して何かを得るという）「手段としての文化」であったものが、次第に踊ること自体を目的とする「目的としての文化」へと変容してきていると言えよう。こうした活動の方向性の違いも、結局は、華僑社会という根の有無に起因するものと考えることができる。

(26) context-sensitive、context-free は、ノーム・チョムスキーの用いた術語である（『文法理論の諸相』安井稔訳、研究社、1980 年）。